

河内 清 著

ゾラと日本自然主義文学

梓 出 版 社

著者略歴

かわ ち きよし
河 内 清

1907年 愛知県に生まれる
1930年 東京大学文学部仏文学科卒業
1948年 旧制静岡高等学校教授，静岡大学教授，東京教育大学教授，
白百合女子大学教授
現 在 静岡大学名誉教授
著 書 『エミール・ゾラ』（世界評論社）
『ゾラとフランス・レアリスム』（東京大学出版会）
編 書 『自然主義文学——各国における展開——』（勁草書房）
訳 書 テーヌ『シェークスピアからミルトンへ』（共訳，大内書店）
ゾラ『大地』，『居酒屋』，『ナナ』（共訳，岩波文庫）
ゾラ『生きるよろこび』（筑摩書房）
ゾラ『ジェルミナール』（中央公論社）
その他

ゾラと日本自然主義文学

定価は函に表示

1990年9月7日 第1刷発行

《検印省略》

著 者◎ 河 内 清

発 行 者 本 谷 高 哲

印 刷 ヒ グ チ 製 版

東京都中央区新富2—1—4

発 行 所 株式会社 梓 出 版 社

〒270 千葉県松戸市新松戸7—65

電 話 0473 (44) 8118番

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

ISBN 4-900071-89-7 C3095

目次

ゾラと日本自然主義文学

第一章 自然主義文学とはなにか……………3

一 フランスの自然主義 5

——レアリズムとナチュラリズム——

二 フランス自然派小説の技法と一般的性格 15

三 ゾラの芸術作品の定義について 35

第二章 中心的作家ゾラの形成……………45

一 第二帝政下の学校生活 47

二 二十九歳の曲がり角——ゾラのばあい 56

三 ゴンクールからバルザックへ 65

——手紙にみえるゾラの足跡——

四 「危機のあくる日」から『居酒屋』へ 71

第三章 ゾラをめぐる作家・芸術家たち……………87

一 ツルゲーネフとゾラ 89

二 モーパッサンのゾラ嫌い	95
---------------	----

三 アナトール・フランスとゾラ	100
-----------------	-----

四 ルカーチとフランス自然主義	108
-----------------	-----

五 ゴッホとゾラ	117
----------	-----

——『大地』をめぐって——

第四章 日本近代文学とゾラ……………129

一 日本近代文学とゾラ——概観	131
-----------------	-----

二 外国文学と日本自然主義文学	134
-----------------	-----

——ゾラ・逍遙・二葉亭——

三 ゾラと日本文学	144
-----------	-----

——ゾライスムの初期、逍遙・鷗外への反映——

第五章 『小説神髓』の源流を求めて……………155

一 『小説神髓』とフランス自然主義	157
-------------------	-----

二『小説神髓』の成り立ち 172

——テースとゾラと逍遙と——

三テースと『小説神髓』 180

——「小説の主眼」の章をめぐる——

第六章 明治期自然主義の進展と挫折……………201

一 永井荷風とゾラ 203

二『破戒』——それを生んだものと崩したもの 225

初出一覧 241

あとがき 244

ゾラと日本自然主義文学

第一章

自然主義文学とはなにか

一 フランスの自然主義

——レアリズムとナチュラリズム——

フランスの自然主義文学は、十九世紀の前半とくに一八二〇年頃から四〇年乃至五〇年にかけて隆盛をみたロマンチズム文学への反動として一八五〇年前後におこったレアリズム運動の延長発展の上に六〇年代におこり一八九〇年前後までつづいて栄え、当時の主流的文学傾向として多くのすぐれた作家を生んだ文学である。ロマンチズムは大革命によって解放され自信を高めた市民精神を反映する強い感受性や抒情性、個性の自由な発露を特色とする主観主義の文学であったが、ルイ・フィリップ時代（一八三〇—四八）の産業革命、科学の進歩、実証主義思想の発展は、人間や社会についての客観的な観察、探究の精神をそだて、それに応ずるレアリスムの文学傾向・運動をおこすことになった。シャンフルーリによれば、レアリズムという言葉は二月革命の頃に生れたものだそうだが、その真偽はとにかく、レアリズムという言葉ははじめは画壇のクールベらの傾向をさして用いられ、ついで五〇年代におけるシャンフルーリやデュランティの文学傾向や運動をさしてはでに使われた。彼らはすでに世を去っていたスタンダールやバルザックの文学をすぐれたレアリズムとし、自派の先駆者、大先輩として仰ぎ、彼らにむしろ反撥したフロベールまで巻きこんで、作品の面でも理論の面でも、というよりむしろ後者ではなばなく活動した。

デュランティらはその雑誌「レアリズム」(一八五六―五七)の中でレアリズムをこう説明している。

「レアリズムは人々の生きる社会環境や時代の正確な完全な誠実な再現を主張する。研究のこのような方針は理性や知性の要求や公衆の興味によって正当化されるし、あらゆるうそやごまかしをまぬがれるからだ……したがってこの再現はすべての人々から理解されるためにできるだけ簡明であるべきだ」

ところがギィ・ロベールによれば(1)、一八六〇年頃になるとこのレアリズムに冷淡で、この言葉をつかわないで物をいう批評家が多くなり、かつ小説は生物学的、生理学的な人間の観察・解剖の傾向をつよめてきた。当時の大批評家サント＝ブーヴはフロベールの『ボヴァリー夫人』(一八五七)をよむとすぐそこに「生理学的、解剖学的な」冷酷な人間の分析・描写をみて反撥し、この作品にあまり好意を示さなかったのだが、この小説はまもなくレアリズムの典型的な傑作として多くの読者、追隨者をもつことになったので、これも小説のこうした傾向への発展を押しすすめる一つの力になった。しかしその根本には一般公衆の間における自然科学への尊重、科学的とくに生物学的な人間や社会の見方の広範な普及浸透があった。この頃にはフランス人もまたダーウィンの『種の起源』をさかんに読んでいたのである。

ついでゴンクール兄弟が十八世紀風俗史の研究からふたたび小説にかえり、一八六五年には傑作『ジェルミニ・ラセルトゥ』をかいいて、生理学的な人間の探究を一段とおしすすめ、それにならってゾラも佳作『テレーズ・ラカン』をかき、彼らがこうした文学をナチュラリズムの名でよび、とくにゾラがこの言葉を好み、これをもっとも精力的に押しだした。

そこでゾラの作家、ジャーナリストとしての成長や成功、フロベールやゴンクール兄弟をも大先輩として含めた

ゾラとその仲間の活動や拡大が、けっきょく一八八〇年頃の自然主義文学の黄金時代をもたらすのである。

そこで文学上のナチュラリスムとかナチュラリストという言葉はブリュンチエールのような当時の大批評家の使用例からしても、また当時のジャーナリスムでの使い方からしても、好むと好まざるとにかかわらずフロベールまで含めてゴンクール兄弟からゾラ、メダンのグループ（ユイスマンス、エニック、セアル、アレクシス、モーパッサン）、その他群小作家、時にはドーデまで指したわけだが、ナチュラリストとかナチュラリスムとかいう言葉は、文学上にかぎってみても、決して六〇年代にはじめて使われたというわけではない。五〇年代にレアリスムという言葉がさかんにつかわれていた当時にも同じ文学傾向をさして平行して使われていたのである。またレアリスムという言葉も、いわゆるナチュラリスム時代になっても、まったく消えたわけではなく、レアリスム・ナチュラリスムとつづけてかいたり、単独にレアリスムという言葉をつかって、ナチュラリスムの文学を指したりもしていたのである。

こうした十九世紀フランスの文学傾向、文学思潮の発展をふまえた今日のフランスの多くの文学史家たちはレアリスムとナチュラリスムとを一線をひいて区別しない。いくらか極端に思えるのは、シャルル・ブーシャの場合で、彼は一九四九年に十八世紀から二十世紀にいたるまでの写実派作家の文学史をかき、それに『フランス自然主義文学史』（二巻）という書名をつけた。そしてその巻頭で、レアリスムとナチュラリスムとはただ一つのものにすぎない。だからこの本の題名としてレアリスムという語をとらず、ナチュラリスムをとったのは、絶対的な必要によつたのではなく、ある決意があつてしたことでもない。ナチュラリスムの方がレアリスムより多くの傑作を生んだので、前者をとったのだ、前者は後者の頂点だ、と述べている。さらに現代のレアリスム、ナチュラリスム研究

の一権威ルネ・デュメニルもいつている。

「二十世紀の黎明にいたるまで、ナチュラリスムはレアリストの運動をつづけた。レアリスムとナチュラリスムの間には、作品の発表時期とある種の抑揚、つまり非常に多くエミール・ゾラというグループの首領の排他的な頑なな性格からきた理論や手法の一種の誇張、以外の相違はない」

この文章からしても文学上のナチュラリスムとレアリスムの間には本質的な区別はなく、この二語の主として使われた時代がちがひ、指導者の性格からきた理論や方法上のニュアンスにいくぶんの相違があるにすぎないことになる。つまりナチュラリスムはレアリスムの継続発展と考え、その相違を全然みとめないわけではないが、はなはだ軽く評価するわけだ。

ところが、このようにほぼ同一視するフランスの文学史家たちに真向から強く反対する一連の人々があつた。それは十九世紀以来のロシアの作家・批評家たち、現代ハンガリーのゲオルグ・ルカーチ、それらとつながる現代フランスの左翼批評家たちである。

フランスの自然派グループにはすぐれた理論家がいなかったので、ゾラは作品をつぎつぎと発表するとともに、一八七五年頃からは自から『実験小説論』その他多くの論文や記事をかいて、自然主義文学を解説し主張し推進しなければならなかった。その際は友人ツルゲーネフの紹介で、それらの原稿をまずサン＝ペテルスブルクの有力な雑誌「欧州通信」(Vestnik Evropy)に発表し、ついで「フィガロ」や「ヴォルテール」などのフランスの新聞雑誌に掲載することがたびたびだった。そこでフランスですでにその頃ブリュンチエールを中心に高まりつつあつたナチュラリスムへの反撥に多分に通ずるところのある反撥が、ロシアの作家・批評家の間にもおこつたのだつた。

ブリュンチエールにとって、芸術は現実の奴隸的模写ではなかった。現実には芸術の素材ではあったが、芸術家は見るだけでは充分でなく、感じ、考えねばならず、現実を取捨選択し、そこから形式をかりて、より高い美的観念を表現すべきだった。その観点から当代のレアリスム・ナチュラリスムの文学を現実模写の文学として痛烈に批判し、バルザックは彼ら当代レアリストの祖ではあるが、本来レアリストではなかったとして、高く評価したのであった。そしてナチュラリスムの文学をバルザックの文学からの墮落と考えた。

ところで当時のロシアのすぐれた批評家たち、ベリンスキー、チュルヌイシェフスキー、ドブロリユーボフ、サルチコフ・シュチュエドリンはそのバルザックやスタンダールこそ、プーシキン、ゴーゴリ、トルストイらとともに偉大なレアリストであると考え、彼らの文学を典型的なレアリスムと考えたので、ナチュラリスムをむしろレアリスムの歪曲であり墮落であり、かくされた反レアリスムであるとして非難した。そうした考え方はその後マルキスト批評家ブレハーノフやゴルキーをへて現在につづき、今日のA・I・プーロフなども同じ思想を表明している。ジャン・ヴァルロの解説によると②、プーロフはナチュラリスムに決定的な二つの特徴をみつめている。それは細部事実の崇拜と記録や事実の信仰ということであった。こうした特徴のあげ方が、妥当であるかどうかはともかくとして、彼によればこれら二つの特徴は一見バルザックやスタンダールのレアリスムにも共通する特質であるかのようだが、その内容は異なつた。つまりバルザックやスタンダールの文学の場合、細部事実は普遍的なものの具体化であり、彼らは普遍的なものを表現するために細部事実をえらぶ。ところがゴンクール兄弟のような自然派作家の場合には、細部事実のために細部事実を追求するので、むしろシャンフルーリやデュランティの後を追って塵箱のレアリスムに落ち、ゴルキーのいわゆる「第六の指」つまり異常なものを描くことになつたとした。また自

然派の記録や事実の信仰という点については、彼らは記録や事実の探究による客観主義の描写を主張し、例えばゾラは、作家はモラリストとして議論したり註釈したりせず、ただ解剖家として事実を展示するだけでよいとするが、これは普遍化や理論的思考の放棄であり、そのいわゆる客観主義は、要するに勝手な主観主義にすぎないとする。

ヴァルロはこうしたブーロフの見解を全面的に支持し、彼もまたナチュラリズムはレアリスムの正統な発展ではなく、その歪曲、墮落であり、むしろかくされた反レアリスムであり、レアリスムや社会主義レアリスムはレアリスムの発展をはばむものとした。そしてこの点ではルカーチも同じで、自然主義文学を作家にみえたあるがままの世界像を、世界のより本質的なものとの関連で取捨せずに、そのまま写した文学として、バルザック的なレアリスムとはつきり区別した。

マルクスやエンゲルスの高いバルザック評価をうけついだ左翼系の批評家たちの自然主義評価はこのように低く痛烈だった。だが彼ら自然派作家たちが、偉大な師として仰ぎ模範としたのは、シャンフルーリやデュランティではなく、スタンダールでもなく、まず第一にバルザックだった。十九世紀後半の作家たちがバルザックをどのように見ていたかは、一八九〇年頃ゾラが文芸家協会長時代に依頼したのがきっかけとなって、ロダンが制作した有名なバルザック像の怪物的な偉容によくあらわれている。ところでそのバルザックは、周知のように、博物学が動物のあらゆる種を研究するように人間のあらゆる種類を研究し、完全な風俗史をかこうとした。そして「私生活場景」、「地方生活場景」、「パリ生活場景」等々に分類される百巻近い作品でなる『人間喜劇』を見事に実現したのである。そこでバルザック的な小説をかき、風俗史をつくるという考えは多かれ少かれその後のすべての作家の胸にあった。フロベールにもゴンクール兄弟にもあったが、ゾラにいたってはもっともはつきりしていた。一八六七、